連載90 在宅医療奮闘記

平成7年より在宅を開始した私の思い出

（医）東西会 千舟町クリニック院長
橋本 満義（66歳・内科）

「あれ、ご先祖さまの墓が無くなっている」と、叫ぶ母の仕草を見て、認知症の診断にあらためて納得する娘

10年前のある日、患者Aさん（87歳、女性、アルツハイマー型認知症・高血圧症・骨粗鬆症）の娘さんから相談を受けました。亡きお父さんのお墓参りに行ったところ、Aさんが迷子になったようです。なんとかAさんを見つけだしたのですが、「ご先祖様の墓がない」と言うので、墓まで連れて行くと、今度は「墓が前より小さくなっている！」と叫んだとのことでした。

問診しながらお話を聞いてみると、Aさんは最近、マンションのエレベーターで、自宅のある2階を通り過ぎ、4階まで行ってしまい、自分の居場所がわからなくなったりするようでした。1年ほど前には、自宅の階段で転び、救急病院に運ばれていたようです。幸い頭部に異常はなかったのですが、腰部打撲症の診断を受けていました。あらためて、脳神経外科専門医を紹介しましたが、器質的異常は認められず、認知症との診断結果でした。

私は、今後起こりうると思われる、交通事故や転倒骨折また誤嚥や徘徊など、高齢者特有である生活上の問題点を、前もって熟知することの大切さを娘さんに説明しました。そして、十分理解された娘さんは、独居生活のAさんの様子を毎日見守ることにされたようです。しかし、「県外に住む兄と妹は理解に乏しく、母はいつまでも元気だと思っているんです」と、愚痴をこぼされました。それを聞き、私たち医療従事者が行うべき「高齢者介護医療についての情報発信」の大切さを、あらためて痛感したのです。

今回のようなケースは、最近とみに多くなってきています。とりあえず、近くに住む子ども達が、見守り介護を始めるのですが、長期間になるため、ややもすると優しさ故の自己犠牲を強いられる場合があります。

だからこその国策として、地域包括ケアシステムを提唱しているのですが、それが根付くにはまだまだ時間を必要とします。

すでに、在宅医療、訪問看護、訪問介護、ショートステイ、小規模多機能施設、そして、かかりつけ医、ケアマネージャーが活動しています。これらの情報を積極的に発信し続けることで、最近マスコミをにぎわせている「介護疲れからの悲劇」を少しでも避けることができるのではないでしょうか。

「お医者さんが来てくれる」
24時間・365日態勢で対応（松山市全域）
私たちは質の高い在宅医療・看護・介護を目指しています。

医師数 21名
（常勤6名、非常勤15名）
内科・外科専門医 18名
（国立がんセンター勤務歴有3名）
精神科専門医 2名
麻酔科専門医 1名
（ペインクリニック科）
末期がん治療（緩和ケア）相談室開設！

Hyper Blood Viscosity（高血液粘度群）を科学する 臨床生命科学（体質・病態学、栄養学）研究所開設
「地方創生健康長寿研究会」平成27年4月1日発足

機能強化型・有床 在宅療養支援診療所
（医）東西会 千舟町クリニック
松山市千舟町6-4-9 Tel:089-933-3788
http://www.touzaikai.jp/